天文九年　印本

[illegible]か[illegible]年　全

琢ノ助

No. 253
25

特別
へ13
4182

おりふし。秋のあはれはかぎそのまじきも。つねよりえたゞく。みねのあらしの。雲はそらび谷あなかれ。そのあはればまさとそおれねどふりぬるやどの庭も。まづきこえ。きりはなれて下（つかり）のわさるが。ほのきこゆるも。みすしむやうはおぼゆ。おまへいろなるぞあらはせのぞみなせる木ごとにいろ〱の花よりなほまさりがほなりど。なぐさめぐし物悲。やう〱月のまいぬるぞのあみぎしばさしこ説なかくはかげども。うしはのことゞもおきひあれ

特
へ13
4182

58 2049

せなかにしてまくらはかさふをぬるにとぼそは
音にてこそのありこのほどたゞこの葉まじり
の三花しておされふ三やくる人をなきりぞか
せのをやぶるゝにこゝろと伊へど桑門のあまりし
兼湛ありやこゝにもよくころとそ以てぬこの
こゝろのことく花もののうちひきる中に古き
とより一まきの文などより伊でこれわが師
月波老人禅定のいと海筆にまゝの世そがい
やりすてゝいる草なりよきにおぼえさいて
席せよかしとぞ伊ひきるともしびすごくか
きたてかいそしよりひらき見へるに廓庵の十
牛になぞらへてかりに十二の冊ばそらきを四季
のおもむきをのべてうしかひ草と名付け
たまひぬ春は山路に花ばいざれば夜は河へ
にほいるばかりよりあきこそ月にうろぶき
ふゆは雪はながむるまでにやさしき言葉
かきしてはいそありきをに見せる詞のよこしさま
へるたんすくにのなるそしなりぞなるべし中に

一し回絶はとくなく。一句の法はのぶるなし。頂門のまなこは具する人にあらずんば會しがたく。からむかしよろきいとのろむことはかなし。三祇のちまたのわかるゝこゝはなぎいて直子二の道にいらんともひとゝなるべし。たゞこゝろはむなしうせて。かゝるきゝかたきをしへによらずんば。あらざすといふとも遠からじ。ふかく信じて身心は放下しなたなくこむ人も時とへても覺にはゐでの光はさぐるにおなじかるべし。ろも道を證有あらず。

没にあらず。有にあらず。無にあらず。作にあらず。心にあらず。可にあらず。不可にあらず。理はたえまれて理に即し。心はたえまれて心に即す。千聖もしらでもず。凡夫もたえなれずもと一法のあたふべきもなく。一句のうくべきなし。侍かりいそむや十二をやおそよばい海の老に師として。道はとなふるもの。佛は会して祖師とするなり。究竟して。究竟とせるなり。證をもつて果とし。没はもつて是とし。あるそそや

よりよしあしはえなれいりといひて。あくは
いくましらするなり。木叉いましめてといふで
佛道はたゞ好してむといひてひとへに律によ
るなり。この生死さとらむことそのぞむ所
にあらずといひて。當來は期するなり。古へ
の機縁はみて。そのぶんはおこして。義ときし
言おほきをいうとむなり。安立はなきによつて。
あへて主宰となるなりくるわざはなくして。
道有しいふらむとおもへるぞ。いまきはおほて

えしりくつはへごて。ら西りばかりにわたなしゝ
るべしかる西へまこゝろうる法はたあるしまひ
はらうん伊とこうとしといへど。いへなる人の為の
あらぞなれの道といふその伊うまろやといふ哉なう
はたれは。いろそひとつは。伊うすてあきの木の葉
どすとまろむらむと。ふるこゝをすしうえしては
おりよはきぬ容のさることはあらげりき禅師
のちろざしはよこしうつそ人はしてみんよう
らむ説をやぞ。ミはうく伊しくの下に為がいて

湛所のもとゑばふさぎぬ。湖南隠士観海
寛文いつとせの秋長月

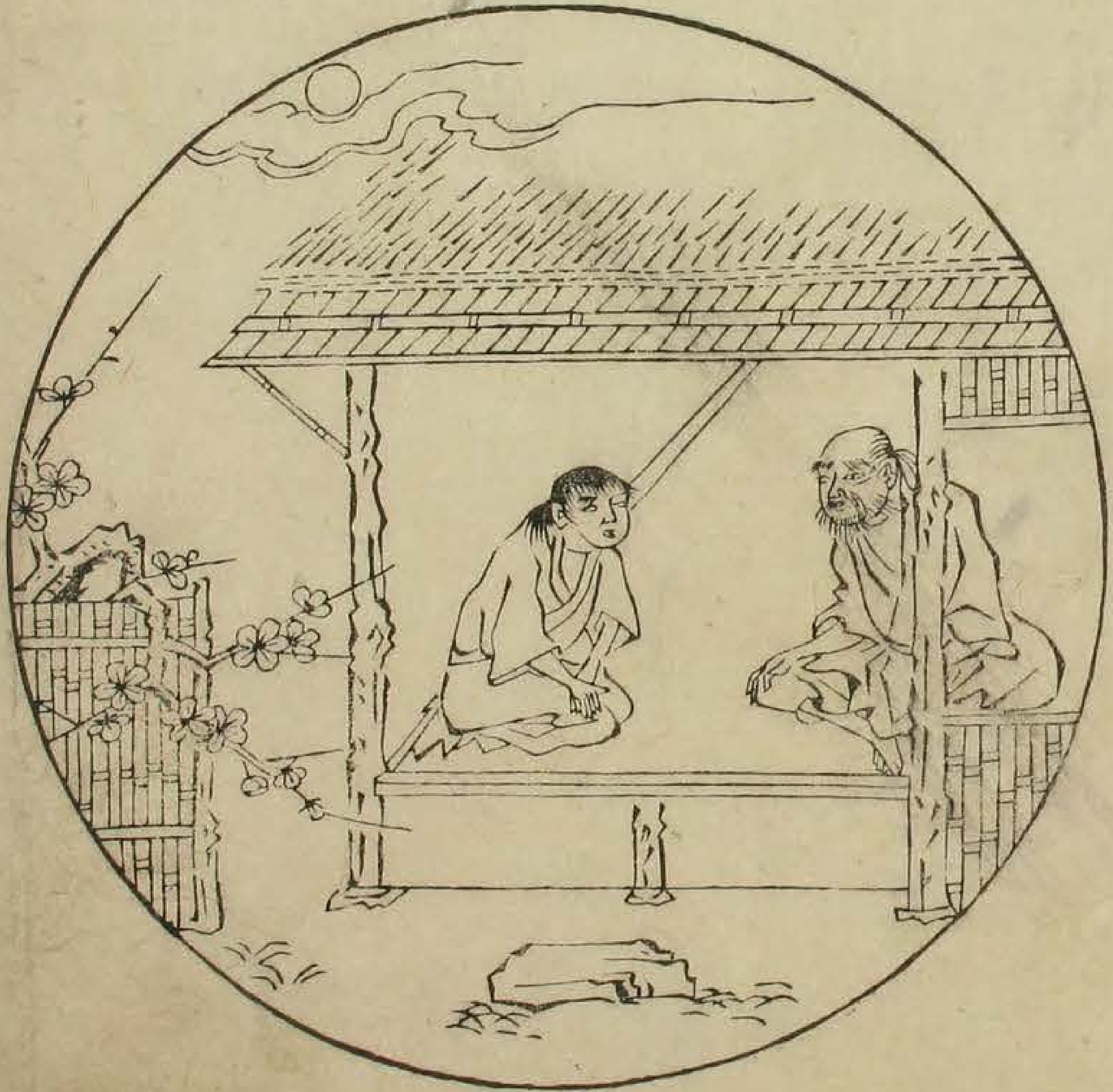
古いろはおこす

むかしあるこの國有。その住ける人のいへは
はしぎをあるが子ひとりもち侍りきとききそむは
まれなれど歌住かくご春とも見えどもはなさむきく
おりかきかきの梅の華をゆきいに書は毛
りてこの花や草しを毛歌ぐみあへなれ寵
ほれかすみさるよ宿ぐひす毛いまだなかず侍
まし年の地かきあへまやなかおもひはぐき
てすみわびさるあやしの井のあこぎしのひま

あはれなるかなもりくる月のさむしろにはも
ねてはおや子もちぢむかれぬきるちくみはへるぞや
ぬしこのはる有むまるまれどをのれはへるか
あきなれ身にしあれぞはらにあるふべきだら
ものなしい今はにふるひとかしらのさしかねに
さつぐよき子に師しうひせよとうぞうぞはうさをひきる
有子えらなづきてよろこひぬ良もあられぞ
くさむれらしばひきもてゆきこきるがてあれぬ
うしなしこのやあれぞにや伴うちともなくうしまし

信りきちくいかりてぎうかるこれをばもきびる
しはるものかなものはそむいう有に牛なく
てえあられぬわざなるぞ伴うにもしてこの牛
をつねいてい世をさるさつぎにもせよあまりこ
はかれまも害せもこなきやしにとをしへまるご
きいてがしこまりさぶらふ伴うにもしてたつ
ねてこゝろ見信ら說とぞかさへまいらちぢうき
きるとぞ。

あぢきなく宇きわがやどの花なめて、

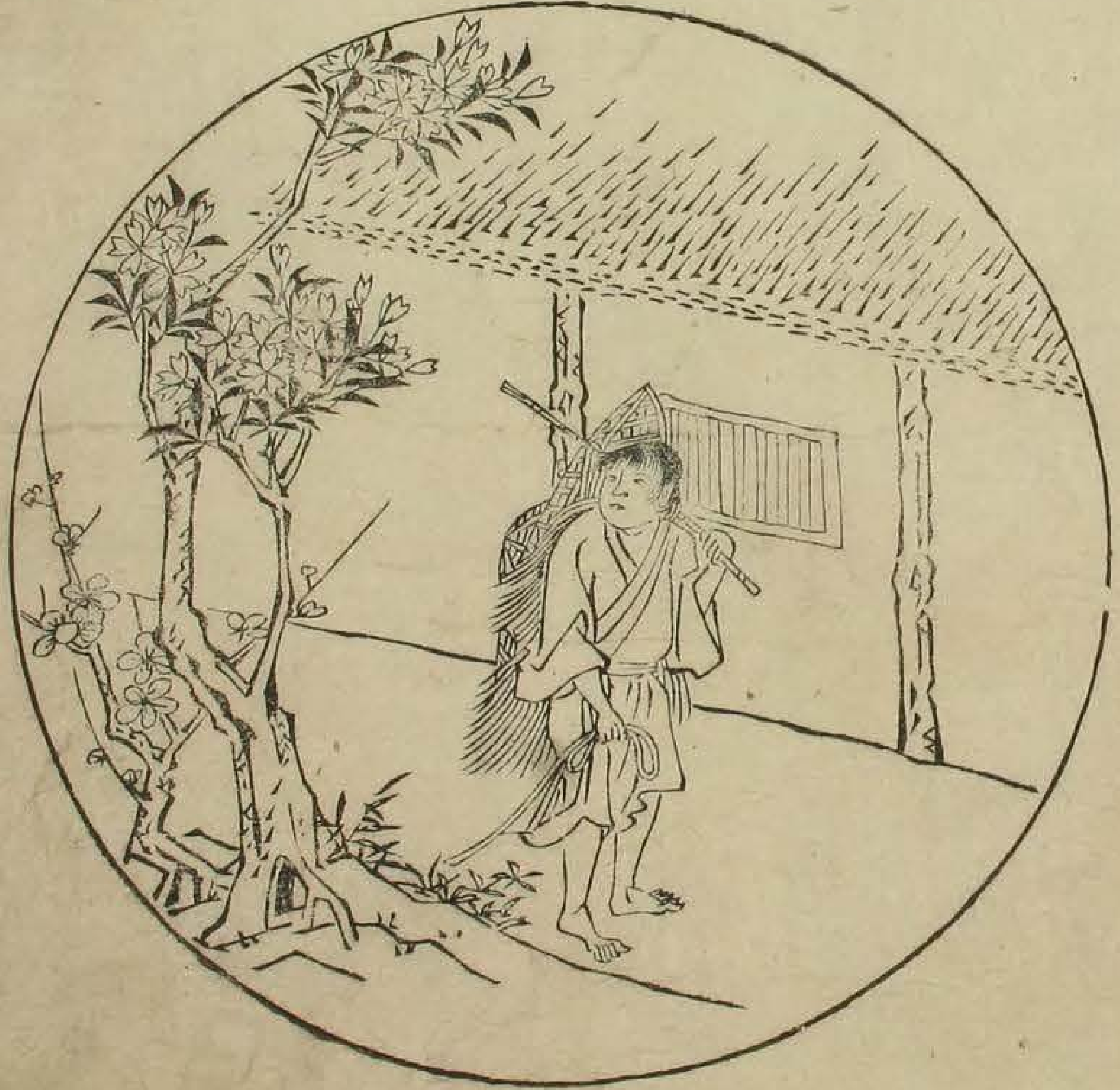


いくとしそるはるもしきぬらむ
おいし身はおしともいみえおもほえず
守きの寺つそるれきろちかき月

いゑをいつる

ちゝ（父）のをしへなきにてゆくおもひよつられね
きるほどまでやまけしきのもなかたすきにて
小田へすべきまときいりぬるく休まうする
所かえつもなきこてよことりなどみさへつり
まふもたすしきかのむ楽うつろひなからち
りのこりさるまゝのとしなりてもなどお庭
ひはしなれぞのたへまけそもいもつ花とさらくわざ
とあらぬ庭のさますべてミすそうくすミなれ
さる草ののきまでほそいちごでもとゞまる
やかたほりてこよなうあしかりしかど牛
なくてえあらぬわざなれどひさかるよおきひ
まりてむちえはなミのさなどひきまし
たえぢてめぐりゆきてはころほてさかへと
いへぢちてミてかしこくもいづるもののみなかいとぎ
てとしよなかいよそいへぐそえせぬはと
まてせきあへぬなミだ袖のきかるをえきぬ
のなごりなかし

けうふせむちりのこりくるのきのむかしの
草ぞうりはへすてゞさき世は
人のミか春でわかれのいやとし
いかりミすてむのきのたつ花



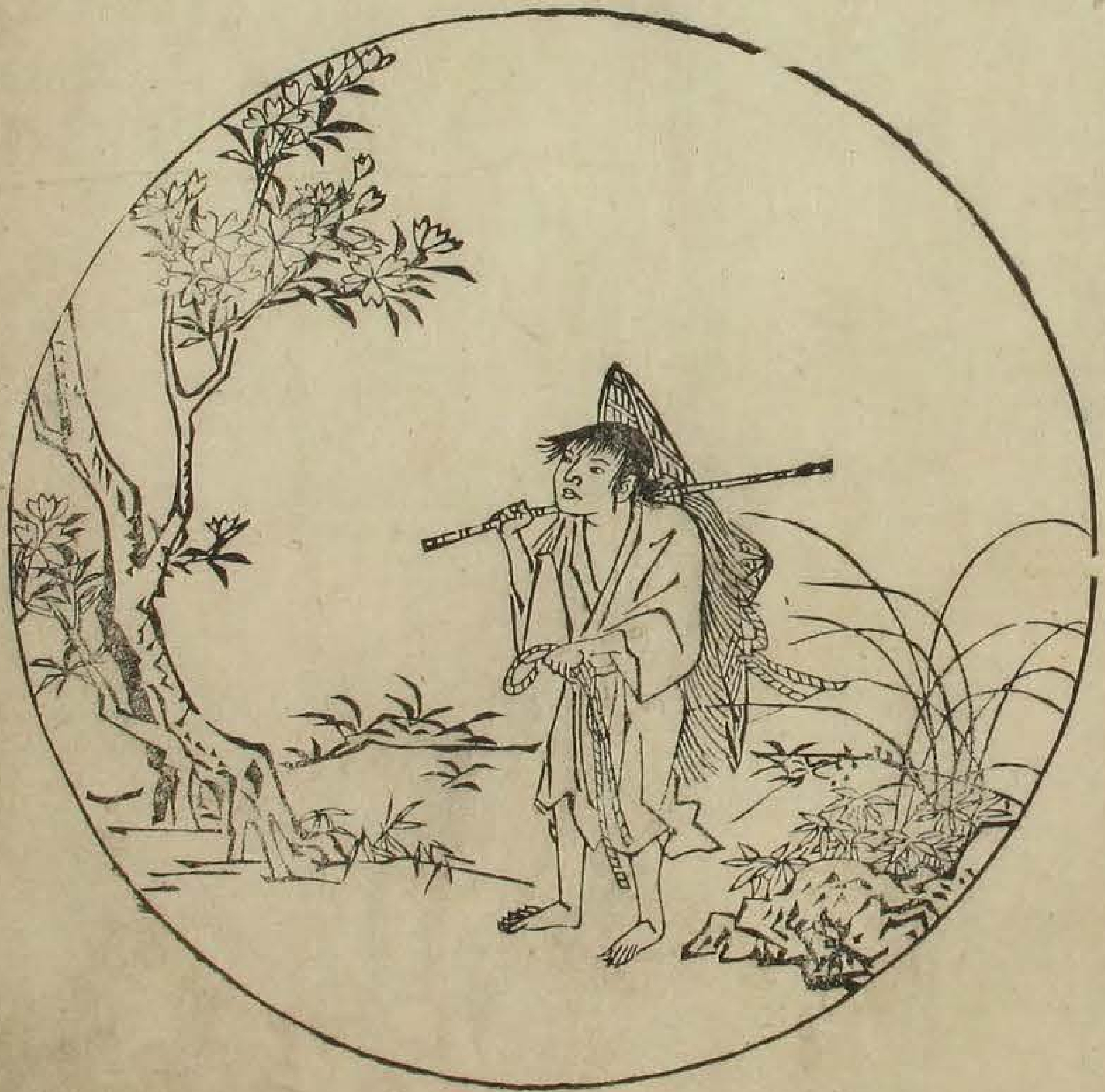
宇しばゝつぬる

すぎちれし雨しみ弄しの雨ミえはいてし。とまりしえやよひだりけ伊と恐ちれぬ。山ざとおばこなみのちぶばどひ雨りきぬれど。こしけるんえなく雨しまま子そゆくまや、春子のくかすこやるり。花えやしくはのりとえて。えむちる完光すぐしがいまをきそミずえおぼ。おえひばきて。ゆくまやの葉の木のきよふぢやまぶきのはりのほりて。きよらにはきこゆる。

たゞろよゝねうえ。はだちまじりれすこれをひやゝりたるさ海。三地のべおぼつかなく、えを宇しのゆくゑと。恐じとる。光えくれ。こゝろえくれぬいざやうだかりゆきがい。ちゃゝむとそだ。こえ谷こえ。あざれどえ。はやくえのえ人しず。伊のぞのりこゝろのゝたぐるしかりきむい

おぼつかなたをあるべ有えるれやま
のがひの宇しれ雨やゝばよむゝむ

たゞろ宇しまつぬるのひえなきこえのは



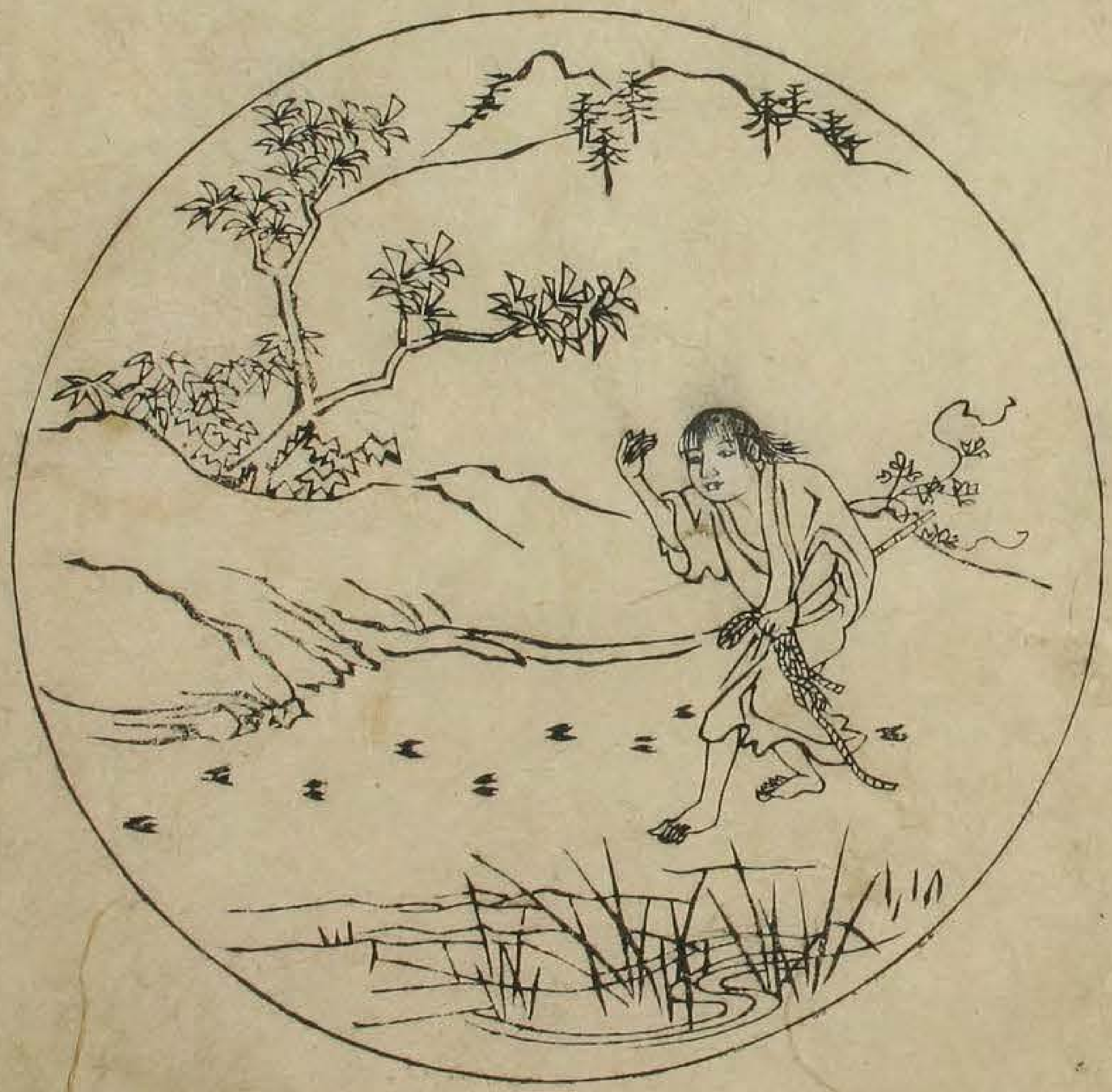
はそらがりともへのミるしゑ

ふもとば見る

をちこちのたづきなきみ山のおくをたづねいるほどみちあるべしるべもなくう月だのりの空あきれる草しまこぎちいとゞみちきしやすてゆくゑもあらやしのみねよこゞうきすぎのこのまよりいかとぎすの一声しおちくるをしきずかりにていづちともなくゆきかうしあらずなりにごりえあるぬのほりさろひきて宇の花のいとあろう見ゆる河べよほまよいぬるほどやいさうこ

しあまをるばいしまありのきをたにしのさいゆくすゑちなびたきをひたゝ有れど伊とゞ古ころ此あそにくなにとよすがよいつねみむとわれあかずもとのぐるおしさえ伊へどあきころぞゆりえばからけじもとのよそうえり見るよすくろみすゝき葛のかつ葉あかみわかりたる仲有ば宇しれよこいるあとかりばいろぎそしりて見るもあやあかうずや

ふもとあれどなばゆくするゑのあきまほし
やまほとゝきすみちしるへせよ

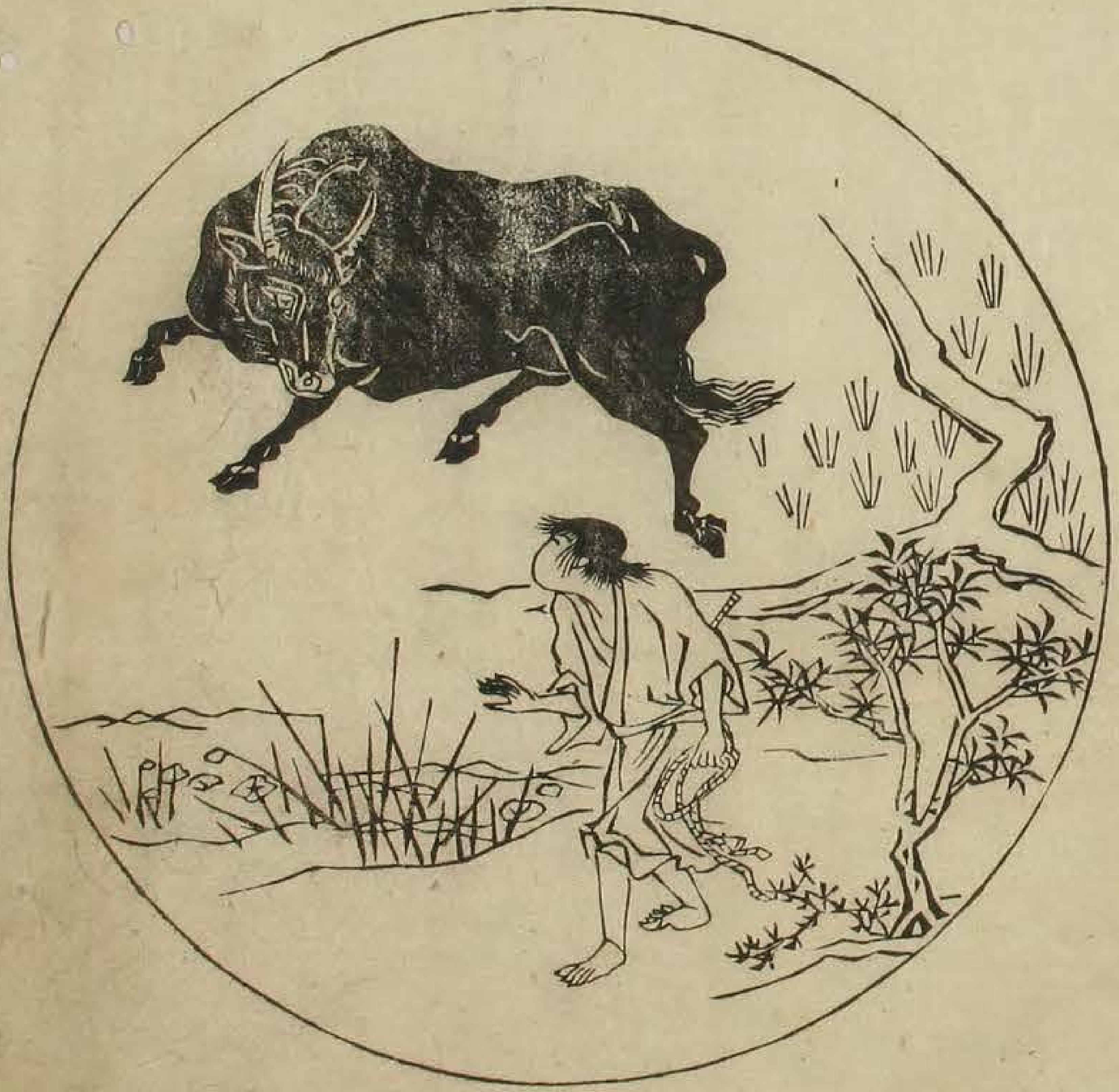


見るゝのゝにあばいはましいまこも草
をふるはたへのすし　めあし　あゆく

うしはへる

うしみあとゞえるまでと見よりもずろり
きろのいさ海しぐなばやまかくかき入ほど。
五月雨のうちあきさり。神ほしあへぬおりふし
までこのりさひきあてゝ見えきれる草しきみ。
えざそたゝにをすどころあくおちくるはせま。
ろばちほゝあゝかしこゝづねありきびすでり。
くりぬるほだりふくおなのいくそゝろほろく。
このそどいえのねまどり。ほおてゞこじの中ゞ。
あかしかねるゞきをそひ。とそのあそれありしの。
はえべよほふるの三つさつゆくはゑるよはれく
まぐさこぬやうくよこそしひきわさすかどれ
いおこひてゞいでぬかきへのおりでるゝまるはやり
そとろくあそたふるある。いろあひさかあねど。
たゝろそときみえきいきそはきこあへずえしり
つおそへそおうれてにきちむそのをやらそえ
あうろぬやうよあつくあゝにきる。

うしそふるころ恋をともれぞ友こゞち



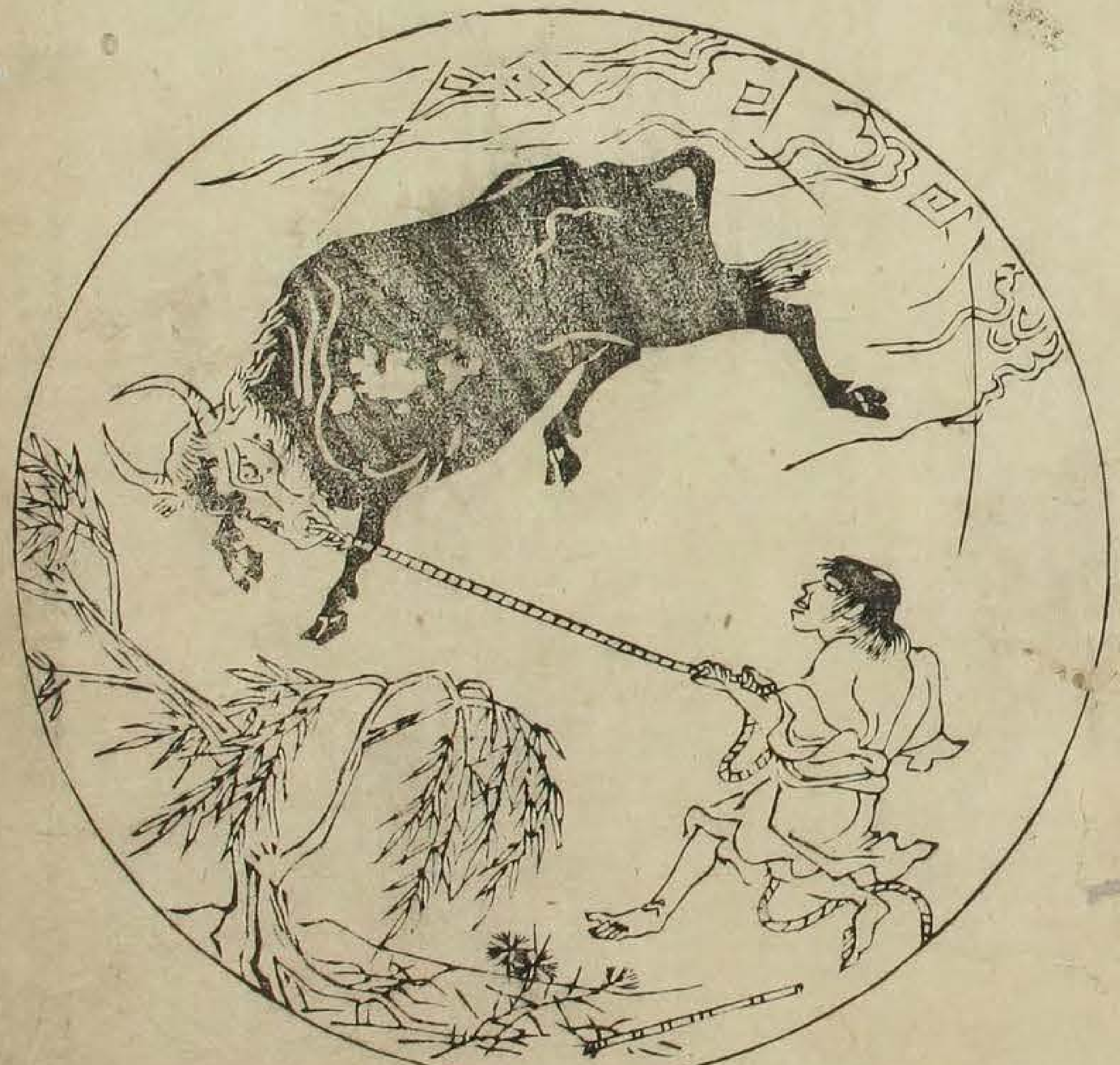
志げれる中すゝちなぞ見る
かゝ地のミえてや、ミきむさなへ出る
山田れそらまでのきする事し

宇しばうる

山田れちらに。宇しのほの見えて。あのうさ。花よる
べくそ而らで。たてろうくおきひわつらひてぞ。たち
ねなりきる。三な月なうぜ。聖べのあづし。二花
ばかりよ見えて。伴どゞ而ほにされ。まはりきりだい。
てねよ。おりさちて。志三づむ了むなやとしてやす
らしきるよ。り三なり伸ふざ花。宇ちしきり
こぬ。秋なのうの世あらましく。身すしむぞかりな
るに。宇しそ不のきよ。いりそちりこて。志づのある

はまし。いる浅つとよりて。そちのほど。ひはのこ
てきり。宇し伊さふゝるへとてなたじゆと。きろうづ
よく。花のそそづなとりはなぎこきりだ。なはくう
きほひまうよい。うなくゆるまひて。たのすぎる
らねさ海。いで待らむ。とり得さるゝひなしなど。
人のひそむ予。たてろうゝるべし。

とうへぬる宇しれてろそのこなりて
ゆふぎつうられきしきとうおきふ
はさなしやまきれる草れをゆるあれぞ

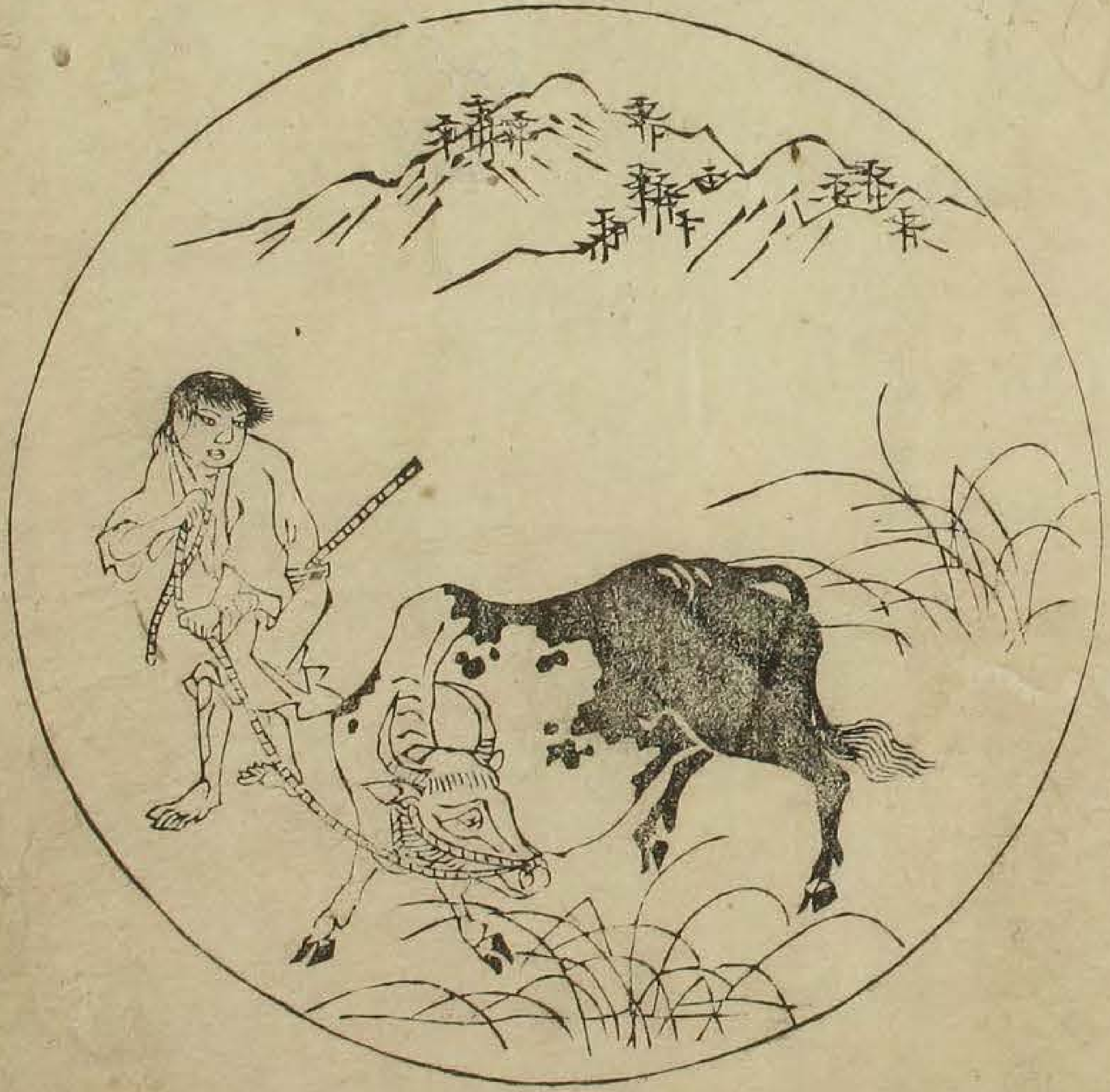


のがれのうしのあがきするかな

うしはのふ

人しれぬ。うしみれことなりけれは。いふあづさて。ち
ばかならずてはなとり。えそてなさず。おもて以行ゆ
こきりにとあるいよ河お井せきの水の。こな
ぎりあへる。おりきるかどよすろ。そあ一代そのて
むとすれど。あかくてまむ。はまそえんしず。きたろ
しそ。文月のちのそまで。みれのべの佐田。とき
どころちきまざ。まりぐすそ。おりくるまで。月
さやかなれど。くまなくてあかぬ。よすがらおぎ

の。うそのぜみすしみて。あたとゞるく。ふるは水の
かなごひしらたそひいで。くるに。いなづまのひかり。
ひやゝのよ。やさ田そ伊ろづくかとまで。とりあつめ
いる。萩は露それ。ひとごのちすさそ。まはるめり。
伊のよそ。して。このうしかひちれて。ふるは水そよ。
こへるまくたれそすよ。やゝ人なるゝやうに見えて。水そ
の。草しそそみきれば。いきのかるなそちしほ雁。
はなそてよなはありながしあきゝぬ秋の
すゝきのそやをみうしはのふなり

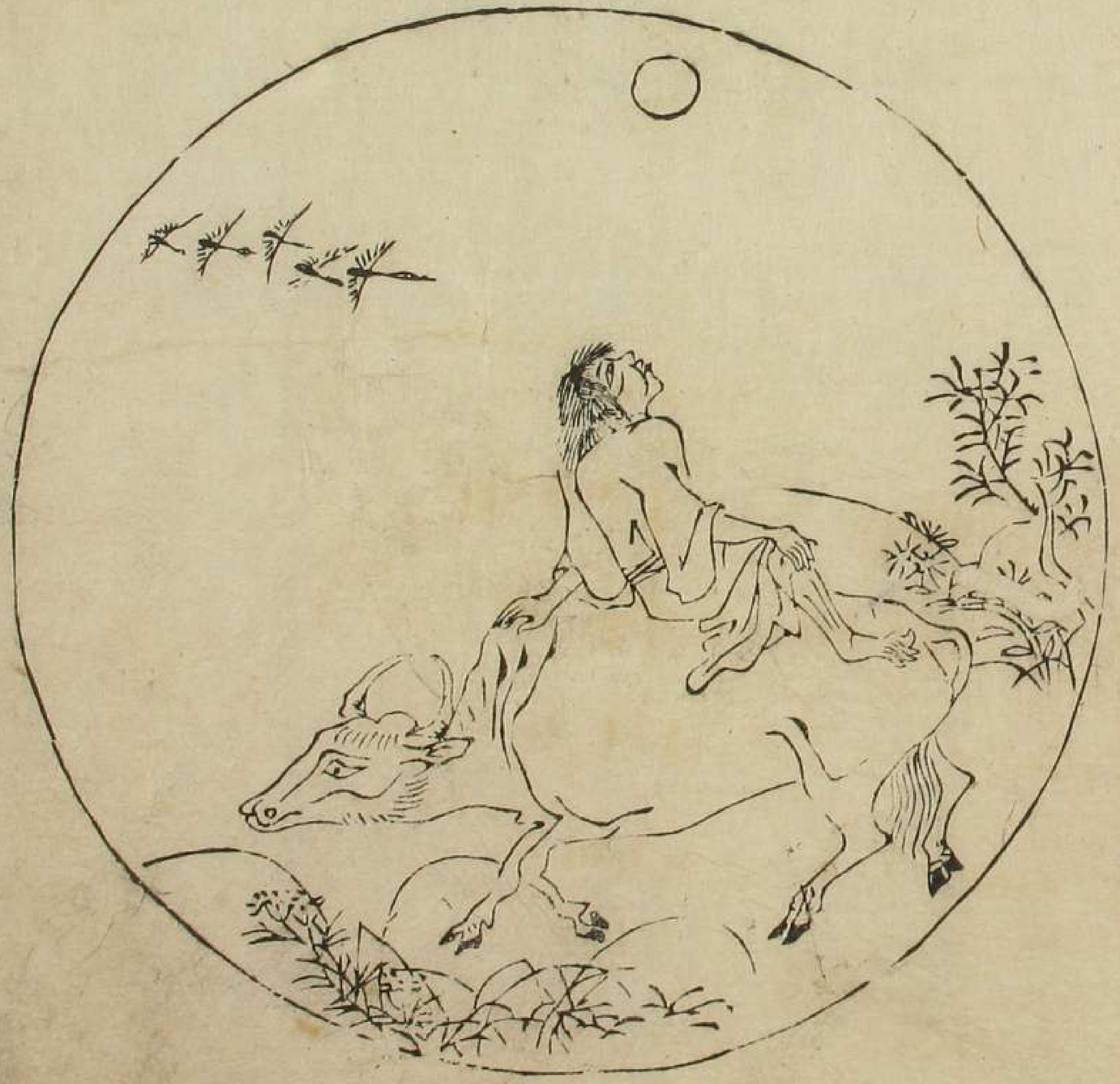


なりてぐさみだれし草のほ中のまえ
やまだわすれぬうしれこゑのな

宇しにのる

ひかずへて。あひなるとはゞやく。宇しへのさかひをま
く。宇しをすゝむれほど。むゝ致きて。いそれさる
さい海よりへ。待るさてそこのほど。まししときは山の
中ばすぎて。ころいとあらきそのからかぜあり
なれなむとぞ。おそそざりき。ふる法やみのごと
ちかくるゝなりまれぞ。宇しにのりて。あやませ
ゆくほどに。宇つしだころなく。きたるこゝを
ぐさど。そ。伊ひそてゆきまゝおどろしきる。

むらく。とたろせきまるゝろぞほどさえば宇しの
あやこみまうするそだかし。なかばも月ちかうて
まゝし。野山をいろはき。そのさびしきちまるば。
去のみねのすみれりきこゆなるそがびし。
月さへくまなくきりえれまざる。あさぬのら
ひとしほあはれおそふ。吹（フキ）くるあらしのすさ
まじきみのりれなきこゆなるそ。誠つきぐし。
のる宇しぬあゆみまづかなへるはおそ
そすむわずるやにはくやうな



きりえるゝ宵えぬ空よそゝろぶきて
三保やしみれ世有しよこゝふるぞ

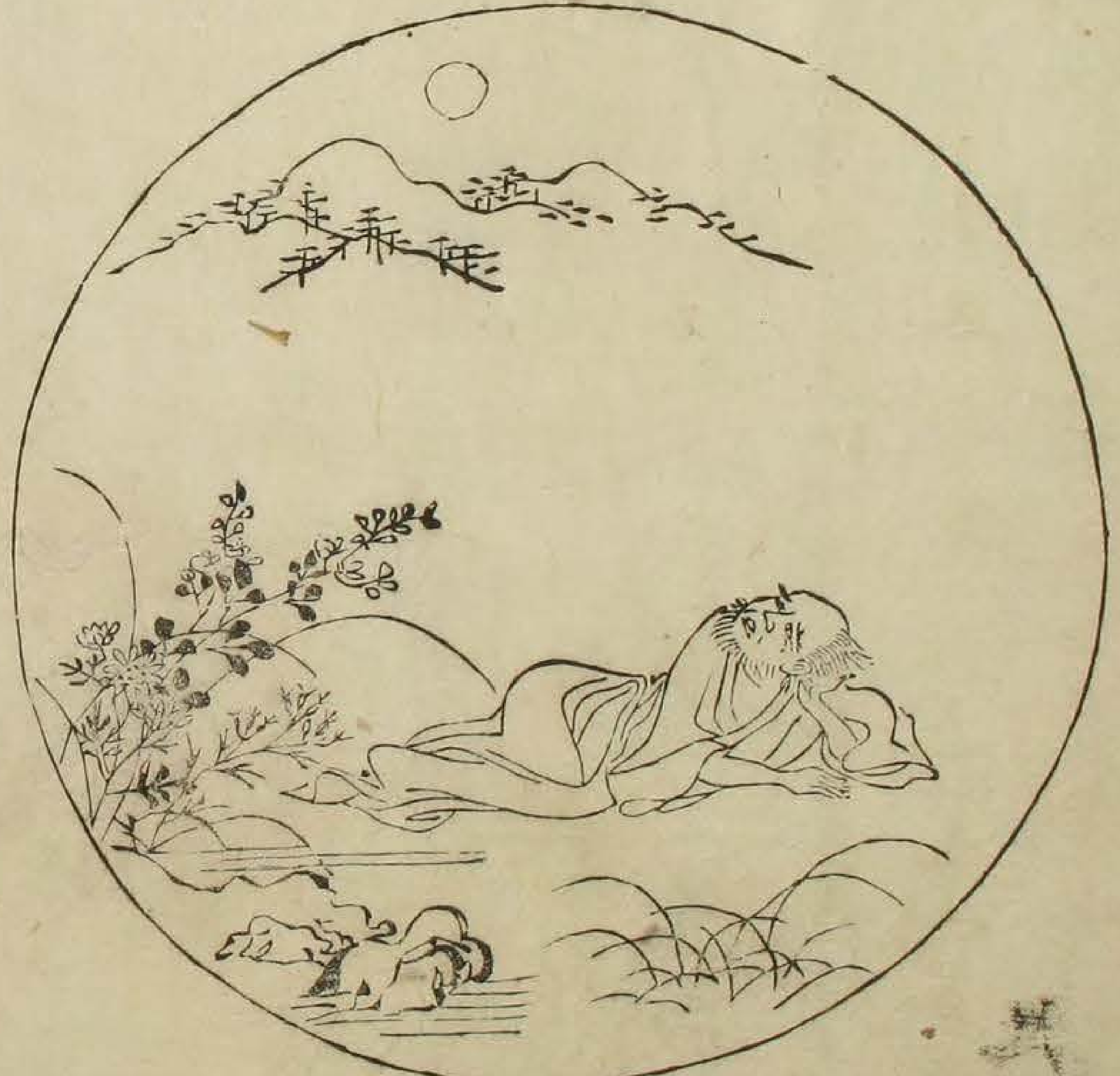
守し桜わする、

長月なのでありけるのべの花もしぎされ
てられてすゝはそだちはかなちてるゝに
ゆくほどなお神やさむきのばしてりよう
かれのめべたるくのどけしや谷の音たなびき、
なりてこゑおかしく一かえすゝずそゝかき
なかしきるほどよやまひこゑこさへぬとうく
なでゆくかなひそれはゝさよ月みひのよ
ほのこゆるそれそしろゝぬのそたるかや
すぎいてぬへのえるながめ手ひて木のその
なくみとしだにだすそみとおろちなくかしめれ
のこる草しだま花もなぞいたくそきぞ虫れ
ねのごとのましくすゞきゝあへる浅からをさも
の風そわさるなり。

ならひそし心にかゝるくもゝなし
月かげのきよみやまべのあき
ちたとなく守ちぬるあきれのしたれど
よきやのつぜれぞめとぞのりしする

守し人交所しんする

ころハ三五月のすゑ。よものれ比きしき。
秋所しんおさくをとしじなわびみえるところ。
そつきれ。ひさする木の葉まじりてささべ
の草しに。思え侍としろしこゆるあしたなごつ
あかのしいそねよ。をすりれ世地あがれる気ぢおち
くて。あかずすなの見えまく。おもふあかれ。人おりよ
見ゆる気。ぞとりしけることをとりし。ましいあるらふ
なる。山のあそひおひとききそ。おきこきふりぬ雲

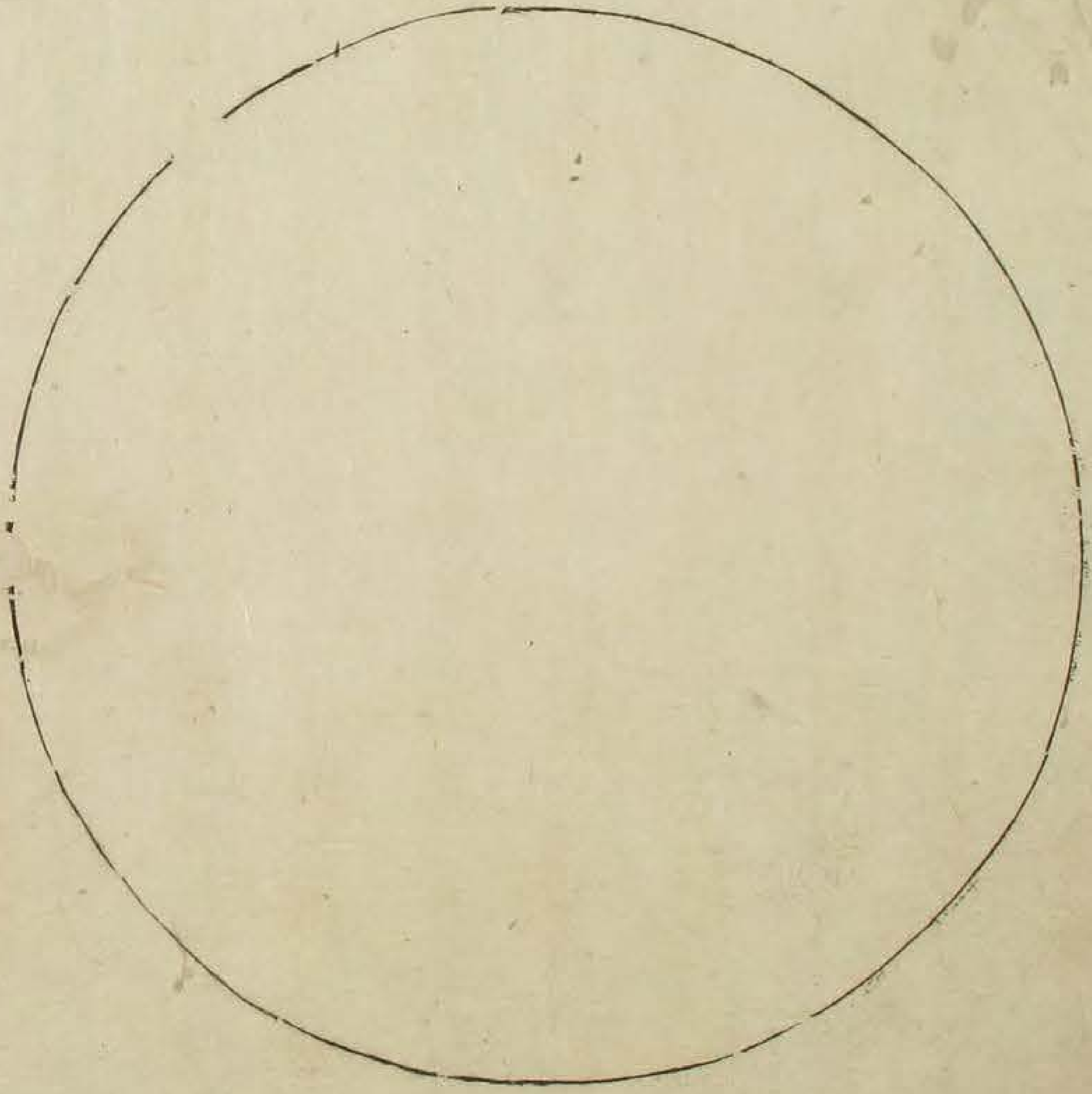


ぬまでなり。こゆるぞ。すこぐ海。とくなるべし
あど。たぞひはさくるなり。四（ヨモ）はみえうく。その中
き、え。やくてざもきく。見るく。そ中さす
なりぬるぞ。ゆんさむる古く地ぞするり。川べ有
ありし花で。このけはしめのところに恋のび
たる。きそひあたりありきめ。三やこみのしほそ。神
ゆきなかし。いひてそてきやしずる人ぞ。あなる
りぞ。月さへそりくそりで。十どもの。のよ
三地すらったふるそなり

それぞせずくそりきやうずなきのあまり
見る人ぞなき、よ中のよれ月
海じろぞ中きぞすりきるか成十鳥
のよ川べのこなひゆるまで

冬月のへる

やうやく冬のへりてむつずミつる子ぬあミ
ぎの字だえいりたれだ志ほり毛まくのきぬ毛
くづれぬほくほど毛あるねありのぞのりあれて
てむとえおもてずまつはし入てミるほど。
きやれのきず毛くだてゝたるひてあれど。
なうひあしやミあやり水のごほりにおち
ざめつくよりとだてまづくのをゆきなひえぞうる
ころえゝ碧えわびしつべあうそにさむき雨

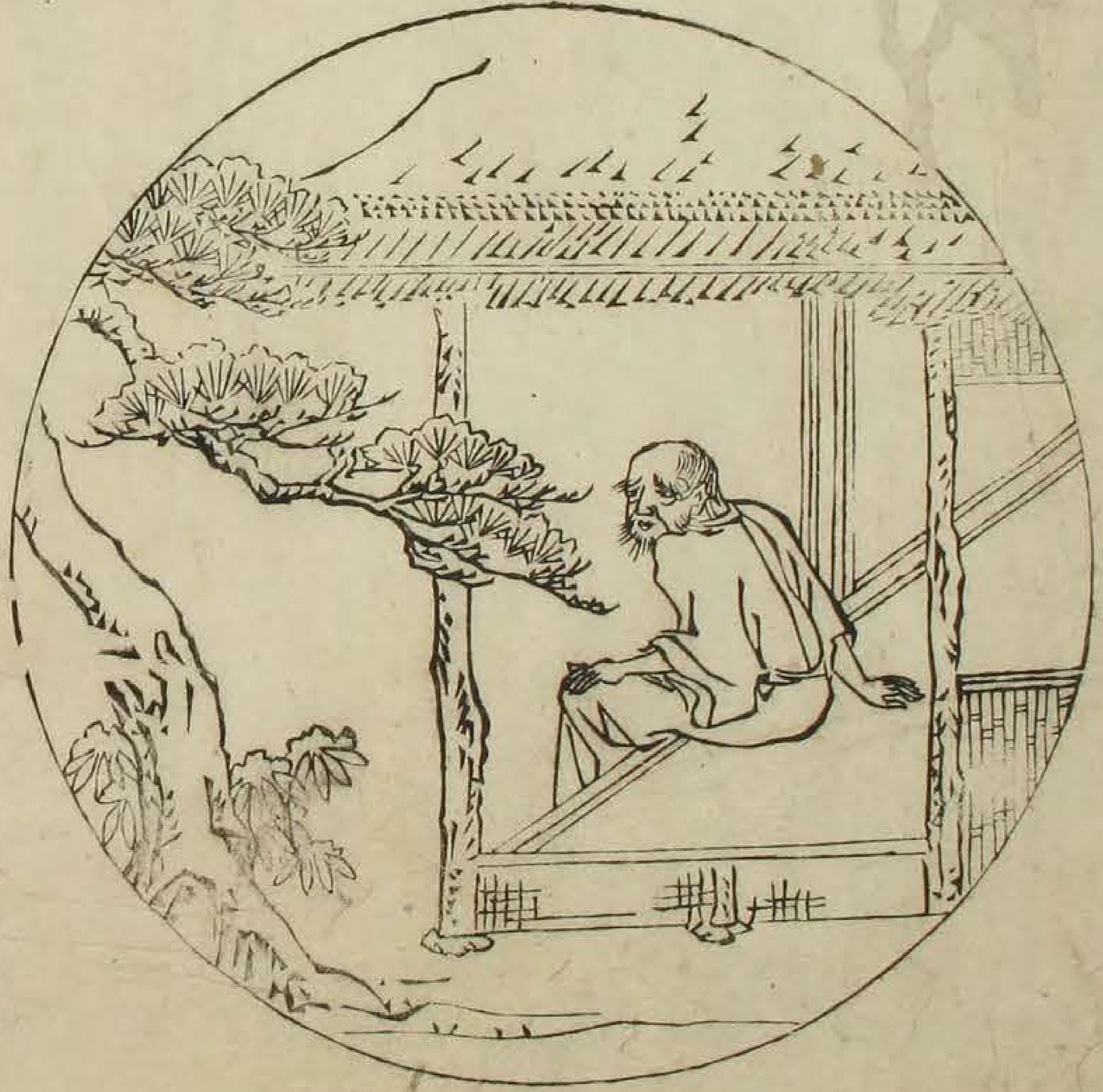


の゛うむしくきこゆるありさまにて。このあいひつそす。
へごりゑみくてげくあるべしと見ればばぢさ
りとてず゜きすてむ゜わざにそあらばりきりとぞれ
そひはぐきてぞれりなどつみえるなゞい浦ゑつつ
ぬ゛庭のをざいぞ雲ぬいろぞむつしにつそりたる。は
まゑみんらずずべてきたになくずきなして゜わざ
となるぬころぞみんと吉ろおほきれ。
伊ゝぼるまあられゆるこゝワ゛かいほの
庭のとばゝぬいろそうそらて

う丸んねとそをの゛伊ろくとのは゛つつ
ゆきさもまじろままつゑそぞらりま

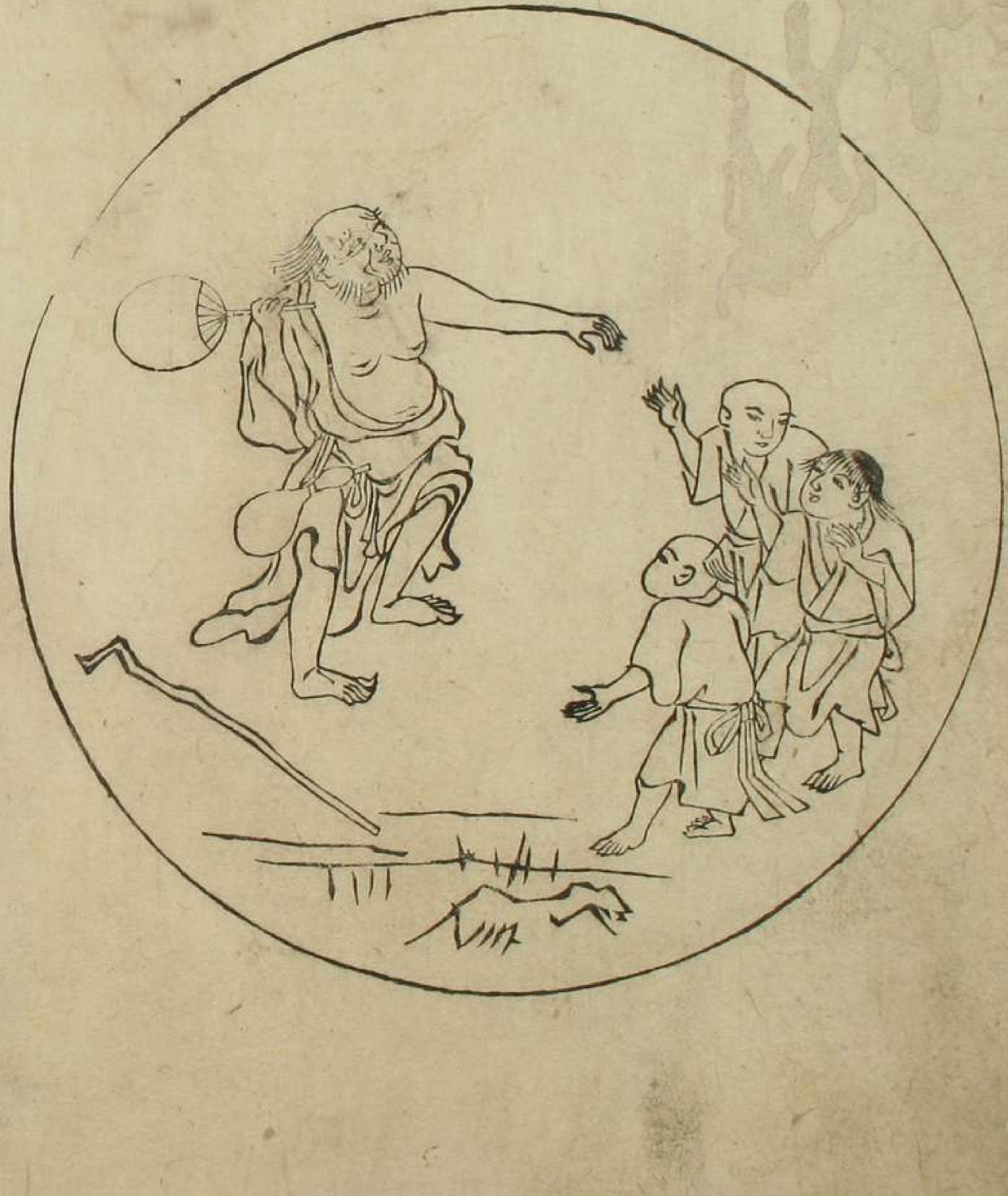
伊ちくらり入

あれさる寺のあミだばひきさてひとりある
まひ。おきるほどよまさし人のとふこともなし。
伊まへ。あれる人も。あれども。ぜひあさむ。なよする
こゆえもなく。の怠いね。うたきてさ心れまく
なり。人はあへどそ。たれ。人と伊。こゆほあしず。
さず。のあらねばそあらず。われあつふ。あさろえ
られぬ。さはなり。あろしそ。春をすれはるだに
ありぬ。へこ地。きかおりふしよそ見てしみのた。



さいつしこ。ホしハ花て。いろくしきりぞ。むね
あらそはゝなぎ。てだしはるそきふくべ。な
ど。こしにつきゝはゝえミたてる代。いちへ子とも
なぶされ。よろひあへるそわつし。たまにより〳〵で
ずろまどありかりや。きのうばいひつ。子ども
どちがをどりきてゆく。三代ずうう。たれきるふれ
くさゆき。たむぞれこゆきいたどの。とおどの。
やねがむすめうがれそうでふちくおそくがおりく。
ゐほのゑん。おいや。のがろく

春ちうきとしれくりなりれそしろし
とやれやまとれしとれ亭なひこ
かず早のそれ有きるうないそつねて
それよまゐるがうやし人有
とよまぞて



寛文九己酉歳孟秋日　寺町三條下町西田庄兵衛開板